

地域と子どもたちの生活

深谷昌志

一 果籠りをする子どもたち

町角から、子どもたちの遊びたわむれる声が消えたのは、いつ頃のことからだろうか。「かくれんぼする者、この指とまれ」や「蛙が鳴くからかえろ」などという言い回しは、納豆やしじみの物売りの声と同じように、風俗史の一断面となる日も近いのかもしれない。

私たちが子どもを対象とした面接調査を始めたのは、今から五年ほど前のことであろうか。始めのうち、日本のどこかに、元気に遊びまわっている子がいるに違いないという気持ちから、絶滅に類した山椒魚か、かわうそでも採す意気

- 一 果籠りをする子どもたち
- 二 心理的生活空間の狭さ
- 三 第三の生活空間としての地域
- 四 地域の再生を求めて

ごみで、地方都市や山村へ出かけてみた。春を迎えたばかりの飛驒の白川郷、汗をふきふき面接を終えた真夏の川崎工場地帯、落葉のとび散る晩秋に訪れた奈良・室生寺の里、寒さだけが印象に残った姫路城下……。それぞれに思い出は深い。遊びたわむれる子どもがいけない点では、どの地方も一致していた。

都市化が自然環境を破壊し、それが子どもから遊び場を奪ったという考え方があつた。たしかに、東京の子どもを例にとれば、とんぼやせみの生息前線が後退するのと同じ軌跡を描いて、子どもの遊び場が失なわれていった。昆虫がいなくなったのは、繁殖のために必要な小川や野

原、そして林がなくなるのが原因なのだから、それは子どもたちのための遊び場の消滅をも意味するという論旨である。

こうした指摘に、一面の真理が含まれているのを否定するつもりはないが、原因がそれだけなら、山村の子らは元気に遊んでいなければならぬ。しかし、どの山里でも子どもの遊ぶ姿が認められないのはすでに述べた通りである。

自然環境の破壊に加えて、テレビの普及、過酷なまでの教育熱、さらに、恵まれた室内環境など、さまざまな原因が重なって、いわば複合汚染のように広がっているのが、現在の遊び喪失の実態なのであろう。

町角から姿を消した子どもたちは、放課後の半日をどう過しているのだろうか。冷暖房設備のととのった子ども部屋に入り、マンガを見たたり、プラモデルを作ったり、あるいは、テレビのブラウン管を見つめる生活である。彼らは子ども部屋の中で、巣籠りにも似た時を過している。

昼間、勉強するために学校へ行き、その後は家庭でくつろぎの時を送る生活でもある。もちろん、最近では、けいこごとや学習塾などに通う子どもがふえたし、家庭の中でも、勉強に追われる子が少なくないであろうから、そのんびりとしていないのかもしれない。しかし、それにしても、町角から遊びたわむれる子どもたちの姿が消えた事態は、きわめて異常と言わねばならない。

二——心理的生活空間の狭さ

巣籠りをする子どもたちは、学校を除くと、家庭という狭い活動領域しか持たず、地域での生活が欠落しているのではないか。そうした問題意識から、子どもにとっての地域の意味を尋ねる調査を試みてみた。

現在、データ分析を行っている過程なので、詳しい結果は、別の機会にゆずらざるを得ない

が、千葉県市川市の小学六年生約二百名を対象とした予備調査によれば、次のような数値が出されている。

まず、表—1は「次のような人は、あなたの名前を知っていると思うか」についての回答でこれによると、子どもたちは近所の人とはともかく、よく行っているお菓子屋さんや八百屋さんパン屋さんなどでも、自分の名前を憶えていてくれる割合は四割ぐらいたらうという。

そこで質問の角度を変えて「あなたが病気で入院したら、次のような人はびっくりしたり、悲しんだりしてくれるか」を尋ねてみた。「仲の良い友だち」や「親せきの人」そして「クラ

スの先生」はびっくりしてくれるが、あとの人たちは「すこしびっくりする程度」が子どもたちの予想であった。

つまり、子どもたちが心理的なつながりを持つ生活領域は「仲の良い友だち」「親せきの人」「クラスの先生」「近所の人」に限られている。しかも、近所の人、表—2の第五例のように「五けん位先の家の人」は他人と全く同様になる。このうち、友だちや先生は学校の中で作られた人間関係であり、親せきの人はもちろん肉親であるから、地域の中に根をおろした心理的空間の広さは「となりの家の人」に限られることになる。

そこで、くどいようだがもう一問の結果を紹介したい。「あなたが遠くへ引越すことになったら、次の人たちは、それを残念がると思

表—1 あなたの名前を知っているか

	知らない	知らない	知らない	知らない	知らない
近所の人	94.7	5.3	0.0	0.0	0.0
お菓子屋さん	28.9	13.2	2.6	21.1	39.5
八百屋さん	23.5	14.7	8.8	11.8	41.2
パン屋さん	15.8	13.2	5.3	31.6	39.5
学校の用務員さん	7.9	5.3	15.8	50.0	21.1
郵便局の人	8.1	2.7	2.7	13.5	73.0
とうふ屋さん	5.4	18.9	16.2	18.9	40.5
校長先生	2.6	10.5	21.1	50.0	15.8

表—2 あなたが病気で入院したらびっくりしたり、悲しんだりしてくれるか

	とても	すこし	ぜんぜん
仲の良い友だち	79.4	17.9	2.7
親せきの人	65.8	31.6	2.6
クラスの先生	51.3	41.0	7.7
校長先生	28.2	51.3	20.5
となりの家の人	24.3	54.1	21.6
5けん位先の家の人	7.5	11.2	81.3
よく行く文房具屋	6.8	43.2	50.0
よく行く本屋さん	2.7	44.5	52.8
近くのお菓子屋さん	0.0	39.4	60.5
近くの八百屋さん	0.0	36.8	63.2

ますか」の問いに対して「残念がる」の割合は以下の通りであった。

- ① 仲の良い友だち 八一・五%
- ② クラスの先生 七四・六%
- ③ 親せきの人 六八・八%
- ④ とりの家の人 六〇・五%
- ⑤ 五けん位先の家の人 三一・七%
- ⑥ よく行く文房具屋さん 一三・四%
- ⑦ 近所の八百屋さん 一三・三%
- ⑧ 校長先生 一〇・六%
- ⑨ 近くの郵便局の人 七・八%

すでにふれたように、これは活動量の活潑なはずの小学六年生の回答である。この場合でも子どもたちと心の交流のある範囲は、友、先生肉親、そして隣人に限定され、地域的な広がりとはほとんど認められなかった。

これらの一連のデータが何を意味するかは、解説するまでもなからう、子どもたちの遊ぶ姿が現象的に消えただけでなく、心理的にも、子どもの中から地域が喪失しているのである。

そこで、もう一つ、考えさせられるデータを紹介しよう。表一3は先ほどと同じサンプルにいわゆる知名人の名を知っているかどうかを尋ねたものだが、その結果が興味深い。

「美・サイレント」の山口百恵、「ヤング・マン」の西城秀樹の知名度は百分に近いが、大

表一3 名士に対する知名率

	知らない ぜんぜん知 らん	聞いては 名前だけ知 る	知っている 名前も顔も 知っている	何人か知っ ている顔も 名前も顔も	100.0
山口百恵	0.0	0.0	0.0	100.0	
西城秀樹	0.0	0.0	4.9	95.1	
大平正芳	34.1	4.9	7.3	53.7	
福田秀夫	65.9	19.5	2.4	12.2	
湯川秀樹	73.2	16.8	5.1	4.9	
飛田雄一	90.3	2.7	2.4	4.6	
鳥一征爾	92.7	4.9	0.0	2.4	
小沢清張	90.3	7.3	2.4	0.0	
松本幸之助	97.6	2.4	0.0	0.0	
三木武夫	98.3	1.7	0.0	0.0	
有吉和子	98.3	1.7	0.0	0.0	
江崎玲於奈	100.0	0.0	0.0	0.0	

平首相は五割を上回る程度にすぎず、前首相の福田氏ともなると「どんな人かぜんぜん知らない」が六六%になる。さらに、もう一代前の三木武夫氏は「知らない」が九八・三%に達し、子どもたちから無名人扱いされる始末である。その他、松本清張、小沢征爾、松下幸之助などの諸氏についても「そんな名前を聞いたことがない」という。

ある程度予想はしていたものの、惨たんな結果におどろいて、子どもたちに、知っているおとなの名前を書かせてみた。

ピンク・レディ、沢田研二、萩本欽一、王貞治、江川卓、北ノ湖、水谷豊、松本零士、狩人池田理代子……である。

テレビのブラウン管にうつる人気歌手やタレント、スポーツマン、そして、マンガ家が、子

どもたちの知っている「有名人」のすべてなのであった。もっとも、子どもたちも、そうした「有名人」の虚像には気づいており、彼らに日本を背負って欲しいかという問いに対しては「そんなつもりはない」と答えている。それにしても、子どもたちはごく狭い身内と、それとは対称的なマス・メディアという二元化された世界の中で暮らしていた。そして、狭い身内の世界と、あまりにも広すぎるマス・コミの世界とを結ぶ中間の生活領域が欠除しているのである。

そこで、もう一度、原点へ戻り、かつての子どもたちにとって、地域がどんな意味を持っていたのかを考えてみたい。

三——第三の生活空間としての地域

子ども時代、隣りの校区へ出かけるのは、ちょっとした冒険心を伴なう行為だった。中でもなんんか仲間をさそって、隣り合わせの校区へ行き、校門の前で「〇〇学校、ボロ学校」と叫んで来るのは、もっともスリルにみちた行動で、無事に生還できるとちよとした英雄扱いされたのを思い起こす。

つまり、かつての子どもにとって、自分の校区が生活圏であり、隣りの校区に対しては、異

国にも等しい感情を抱いていたのであろう。

地域の中での子どもたちの生活は、幼児期のままと遊びから始まる。向こう三軒両隣りの子どもが集まり、家の前にごさを敷いて、ごっこ遊びに興じる。親の目の行き届くそうした範囲が、幼児にとつての安全な生活圏だったのである。そして、小学校へ入る頃から、遊びの範囲がブロックへと広がっていく。町内の子ども七～八人で、かくれんぼや鬼ごっこをするというのがその代表例であろう。その後、学年が上るにつれ、男女の遊びは分離し始め、男の子ならビー玉やメンコ、ベーゴマ、女の子はなわとび、おはじき、お手玉などに興じる年齢となる。こうした場合でも、ゲームに加われるメンバーは、同じ町内の者という不分律があり、よそ者が参加することはめったになかった。

まれには、豪の者で知られるメンコのチャンピオンが道場破りに現れることがある。しかし町内の子ども同士が力を合わせて、強豪と立ち向かうのがつねであった。同じ町内に住む子どもが、地縁を基礎にした「みうち」感覚を持っていたのである。

小学校高学年の子がリーダーとなり、これに中学年の子が加わり、「みそっかす」とよばれる低学年の子をまじえて、地域を単位とした遊び仲間が誕生する。こうした遊び集団に属する

子どもたちを「ギャング・エイジ」と呼ぶのはよく知られた事実であろうが、ほんの十数年ほど前まで、どこの子どもたちも、小学生時代にギャングの中に身を置いた後に、青年期を迎えたのである。そうした意味では、ギャング集団は成人するために不可欠な通過集団であったともいえよう。

それでは、このギャング集団が人間形成に果たした意味は何だろうか。子どもたちは昔も今も、家庭で目をさまし、朝食をとって学校へ行く。そして、半日近くを学校で過して帰宅し、家庭の中で生活を送る。子どもにとって家庭を第一の生活の場とするなら、学校は第二の生活圏となる。もちろん、家庭と学校とが、それぞれに異なる働きをしているのは事実だが、両者はともに、おとなが絶対的な力を持って、子どもたちに「望ましき」を教えるという意味で共通した性格を備えている。

「社会化」の用語から連想されるように、子どもたちは多くのものを学ばねばならない。家庭内でのしつけを通して、人間としての行動の仕方を学び、学校へ通って一人前の人間になるための知識や技術を覚える。したがって、成長するために、子どもたちは、ある程度、受身の生活を送らねばならないのはたしかであろう。しかし、そうしたおとなから管理された子ども

もたちの生活の中で、子どもたちが主役になれる唯一の場が、先にふれた遊び仲間だった。つまり、遊び場は子どもにとって、おとなの目を意識しないで済む第三の生活空間だったのである。

このところ、遊びの問題に関心が集まるにつれて、郷愁を伴った美化された形で、遊びが語られるようになった。中には、手放して遊びを礼讃する論者も少なくない。しかし、かつての遊びは、おとなにとってそれほど望ましいものだったのであろうか。

具体例をあげて考えてみよう。かつての男の子たちに人気であったメンコやビー玉が、賭けごとという理由から、学校で禁止されていたのは、よく知られた事実であるが、その他の遊びにしても、釘さしは指先を傷つける心配がある、道路での石けりやカンけりは通行の邪魔になる……であった。中でも、小川の両はしをため、中の水をすくい出して、魚を取る「カイボリ」は、もっとも評判の良い遊びだった。もっとも、子どものことゆえ、シャツやズボン汚し、家から持ち出したバケツの泥水を洗わずに、その上、せきとめた箇所は、そのままにして帰ってしまうのであるから、親はむろんのこと、地域の人や教師などのおとなから叱られるのも無理からぬところであろう。

しかし、いかに説得力があり論理的なものであっても、そうした非難は、所詮、おとなの立場からの発言であり、子どもたちにとっては、おとなから禁止されればされるほど、禁断の実をたべるスリルは倍加されるのである。さしずめ、おとなから禁止されない遊びなどというのは、なんとかの入らないコーヒーみたいなのかもしれない。

こうした指摘が極論でないことは、かつての遊びを冷静に思いおこせば、十分に納得できよう。スイカ泥棒、チャンバラ・ゴッコ、ペーゴマ。どれひとつをとっても、学校では決してほめてもらえない行為であった。つまり、かつての遊びとは、おとなたちの望ましが支配し、それへの達成を求められる学校や家庭とは対照的に、おとなから非公認の影の文化の特性を備えていた。換言するなら、非合法の悪の香りをただよわせているから、子どもたちは積極的に遊びに参加したのである。

「鬼ごっこする人、この指とまれ」という言い方があった。遊びは自発性を前提として成り立っていたのである。しかも、遊び仲間集団はおとなの力が及ばない、子どもたちの自治組織であるから、その中で生ずるさまざまなめごととは、すべて、子ども自身の手で解決せねばならなかった。かつての子どものうちにも、い

じめっ子もいれば、こすからい子もいた。そうした子たちには、みんなで力を合わせて、インチキをすれば身の破滅になることを教える必要があったし、泣き虫の子には、泣いたところで問題の解決にならないのを覚えさせねばならなかった。

つまり、地域を舞台に展開された子どもたちの遊びは、一方において、悪の雰囲気のため反社会的な側面を備えてはいたが、他方では子どもの自主性を育て、集団内での行動の仕方を学ばせる機能をも果していた。そして、この二つの機能は、いわば、ものごとの裏表のようにセットさせたものであるから、子どもたちは悪の魅力にふれながら、自発性を伸ばし、集団内での個性作りを行っていたのである。

このところ、遊びの機能を見直そうという気運が強まり、子どもの人間形成に、遊びが大きな意味を持つと評価する論者がふえてきている。思いつくままに遊びの効用を列挙するならば

- ① 身体を丈夫にする
- ② 社会性を育てる
- ③ 創造性を養う
- ④ 情緒を安定させる
- ⑤ 自発性を伸ばす
- ⑥ 知性を開発する

などとなる。すべての症状にきく万能薬のような印象がなくなっていくのだが、これらの効用のうち「身体を丈夫にする」や「創造性を養う」「知性を開発する」「情緒を安定させる」などについては、すでに

ふれた第一と第二の生活領域―家庭と学校―を通して充たすことが可能であろう。しかし、五の「自発性を伸ばす」そして「社会性を育てる」の二点だけは、他の生活領域では果たしえない機能なのである。

青年を対象とした研究者の間から、自発性の喪失を憂える声が強まっている。ある人は、ソビエトの小説家・ゴンチャロフの小説に登場するものうげな青年・オブローモフの名を貸りて若者をオブローモフ病と名づけ、他の研究者は青年期から脱皮しようとしな心理特性を「モラトリアム」と要約している。また、現代の青年を「殻かぶり」と特性づけている識者もいる。

さまざまな立場から青年に迫った研究者たちが、共通に指摘しているのは「自分から何もしようとしな」若者の態度なのだが、子どもを分析する機会の多い筆者からすると、そうした傾向が認められても当然のように思う。地域の中で、自発性を発揮する機会のないままに生活している子どもたちが、成長とともに、一足とびに自立することなどはありえないからである。しかし、現代の青年たちの姿は、子どもたちの病理状況がいやされることなく、青年期にまで及んでいるのを示唆している点で、考えさせられるものを含んでいる。

四 地域再生を求めて

現状の分析に多くを語りすぎたかもしれない。これ以上、事態を悪化させないために、どうすべきか、具体的な対策を立てねばならない。

昨年、他の研究者たちと、地域の教育力をおとなたちがどう評価しているのかを考えるために、小学生を持つ母親約千五百名を対象に、小さな調査を試みた。その中に表4のようなデータがある。

これは「国語や算数の学力」や「基礎的な体力」などの六つの特性を、学校、家庭、学習塾、地域社会のどこで身につけさせたら良いかを尋ねたものだが、表中の数値が示すように「学力」はともかく、「基礎的な体力」や「やる気や頑張り抜く力」、「友だちと遊ぶ態度」などについても、学校を通して習得させたいという反応が六割を上回っている。そして、地域に対する期待は「友だちと遊ぶ態度」にしても、二三・九%にとどまっていた。「やる気や頑張り抜く力」は六・三%にすぎなかった。

もちろん、こうした反応は、すでに地域が子どもたちの遊ぶ場でなくなっているために、あきらめの感情から生まれたものとも考えられるが、それにしても、親たちの意識の中から地域

表4 どの生活領域で力をつけさせたいか (%)

	学校	家庭	おこ やい 塾け	地域 社会
学力	94.9	2.6	2.5	0.0
基礎的な体力	75.3	17.4	0.7	6.6
生活習慣	26.9	57.7	2.8	12.6
やる気	16.5	81.5	0.2	1.8
友だちと遊ぶ態度	64.0	26.8	2.9	6.3
頑張り抜く力	59.3	16.7	0.2	23.9

の意味が薄れているのはたしかである。

なお、親たちに「地域の婦人会が中心となって子ども会をひらく計画があり、それへの協力を求められたら、参加する気になるか」どうかを尋ねてみた。その結果によると、

- ぜひ参加したい 二・七%
- できたら参加したい 二一・二%
- まあ参加したい 五九・六%
- あまり参加したくない 一五・九%
- ぜったい参加したくない 〇・六%

「真意は「できることなら、参加しないですませたい」であろう」が多数を制した。

おそらく、こうした反応は親たちの偽らざる気持なのだと思う。なにかと気ぜわしい毎日ののに、その上、子ども会への協力などは、とてもする気になれないというのである。そこで「地域での子どもたちの生活を指導していくの

はどんな人が望ましいか」を尋ねると
一位II学校外のことにも熱意を示す学校の先生 二四・七%、二位II子どもたちのために奉仕してくれる地元の有識者や経験者 一八・七%、三位II青少年団体のリーダー 一五・八%、の結果がえられた。

熱心な学校の先生がいてくれたら、その人に指導を頼みたいという。

現実にも、こうした親たちの希望に添うように、校外での子どもたちの生活に関心を寄せる学校が増加している。現在のところ、そうした試みには二つの方向が認められ、一つは、学校の中に地域社会を持ち込む改革案である。地域単位の子どものグループを作り、それをたて割りの掃除当番の単位としたり、あるいは、たこあげやお祭りなどの土着の行事を、学校の中で再現したりするプランである。特に、こうした傾向は、いわゆる「ゆとりの時間」の導入とともに各学校で実施される気運が高まっている。

そして、もう一つは、地域の中に学校の影響力を持ちこもうとするもので、学校と社会教育施設、そして、地元のボランティアとが協力して子ども会を指導する。あるいは、地元主催の子どものためのスポーツ大会に先生が参加するなどが、その一例である。

前者を「学校の地域化」と名づけるなら、後

者は「地域の学校化」となる。このうち「学校の地域化」については全く異論はないし、硬化化した学校を魅力あるものへするために、こうした試みを積極的に推進して欲しいと思う。

しかし、後者の「地域の学校化」については疑問が残る。もちろん、こうした方向が、学校と地域との関係を深める効果を持つのを否定するつもりはないが、仮に、関係が理想どおりに進むとしたら、それは地域社会が学校化されること、つまり、第三の生活空間の学校化であって、子どもたちは、受身の姿勢をより強くするだけではないだろうか。

すでにふれたように、かつての地域社会が子どもとの人間形成に大きな意味を持ちえたのは①おとなの目の届かない子どもだけの世界がありそこで②おとなから禁止されている悪の遊びに興じる楽しみがある、の二つの条件を備えていたからである。したがって、おとなのフィルターを通して「望ましい遊び」などでは、子どもたちの自主性は育たないのである。

こう考えて来ると、地域生活の再生が、予想

以上にむつかしいのが分る。というのは、子どもの遊びを復活させたいという意欲に燃えたおとながいたとしても、それが、おとなたちによる積極的な指導という形を通すものであっては子どもの自主性が、育ってこないからなのである。いわば、仕掛人、あるいは黒子のように、表面には出ずに舞台回しの役に徹しうる態度が望まれてならない。

しかし、見方を変えると、遊びの復活はそれほど難事ではないのかもしれない。なにしろほんの少し前まで、どここの地域でも、子どもは遊んでいたのである。そうした遊びの条件をかなえさせることが可能なら、放っていても子どもたちは遊び始めるのではないか。

遊びは時間、場所、友だちの三条件があって成り立つという。「自由に使える時間と、身体を動かせる安全な場と、なんんかの友」とが揃えば、かくれんぼや、鬼ごっこが始まるのである。だとすれば、そうした条件を保証することが、遊びを再生するための近道となる。

具体的な方策としては、せめて週に一日、で

きることなら、水曜の午後を子どもたちの「フリー・デイ」とするのを提唱したい。この日の午後は学校は宿題を出すのをやめ、塾やおけいこごとはこの日に限り自粛し、行政サイドは、露地裏を「子ども天国」にする。そして、地元企業は、グラウンドなどを子どもたちに開放する。もちろん、親たちは子どもを外へ追いだすようにする。あるいは、ボランティアが、危険防止の立場から、子どもを見守る必要が生ずるかもしれない。

地域を単位として、こうした「フリー・デイ」を徹底していけば、子どもたちは、おのずと第三の生活空間の活用を始めると思う。しかも、この試みは、おとなたちの気持さえあれば、予算的な措置の全くいらぬ計画である。市全体が無理なら、校区ごとに、あるいは、町内ごとに、フリー・デイを推進して欲しいと思う。自発性を失なった子どもを生き返らせるためのもっとも有効な手段と考えるからである。

〈奈良教育大学教授〉